



公益社団法人 茨城県農林振興公社
穀物改良部
〒311-4203 水戸市上国井町 3118-1
TEL 029-239-6300 FAX 029-239-6880
http://www.ibanourin.or.jp

1. 平成28年度茨城県稲作共進会・そば共進会表彰式開催される



共進会全体



表彰状の授与



秀賞授与者と中村理事長

当社は、2月17日（金）水戸京成ホテルにおいて、市町村穀物改良協会、農協、農業改良普及センターなど関係者70名の出席をいただき、第60回稲作共進会及び第27回そば共進会の表彰式を開催しました。

稲作共進会は、稲敷市の坂本和夫さんが最優秀賞として農林水産大臣賞を受賞しました。坂本さんは、水稲作付面積9.6haと栽培管理作業を2.2ha（延べ）受託するなど、経営規模の拡大に取り組んでおり、熟期の異なる「コシヒカリ」や「あきたこまち」など5品種を組み合わせ作業分散による、適期収穫や乾燥・調整を行うとともに色彩選別機を導入するなど、品質向上や生産コストの低減に取り組んでいます。また、田植同時施肥や疎

植付け、特別栽培米認証・エコファーマーの取得など、作業の省力化や低コスト化、安全安心への取り組みなどが評価されました。

そば共進会では、常陸大宮市の藤田博子さんが最優秀賞として茨城県知事賞を受賞しました。藤田さんは、6.4haで「常陸秋そば」を栽培しているほか、水稲やイチゴ・ネギなど多角的な家族経営で機械化による作業時間の短縮やコスト削減を図っています。また、農地中間管理機構をとおり栽培面積を拡大するなど農地の荒廃防止や景観維持に努めているとともに、大手コンビニと契約栽培するなど産地ブランドとしての品質向上などへの取り組みなどが評価されました。

今年度は、稲作が29点、そばが7点出品され、いずれも地域の模範となる素晴らしい取り組みで、出品された皆様の一層のご活躍が期待されます。

も く じ

1. 平成 28 年度茨城県稲作共進会・そば共進会表彰式開催される	1
2. 茨城県における飼料用米の推進について	2
3. 青立ちしにくい大粒大豆「里のほほえみ」の認定品種採用と高品質・安定栽培技術の確立	4
4. 最近の米穀情勢について	6
5. がんばる種子生産者！（JA 常陸種子生産部会大宮支部）	7
6. 穀物改良部ニュース	8
(1) 回転備蓄（低温消毒）種子の利用が拡大	
(2) 落花生生産者・関係機関情報交換会について	
(3) 全国そば優良生産表彰式について	

2. 茨城県における飼料用米の推進について

茨城県農林水産部産地振興課

1. はじめに

米価安定のためには主食用米の需給バランスを確保することが重要です。

全国では平成27年産に続き平成28年産の主食用米の過剰作付が解消され、米価は回復してきました。しかし、茨城県における平成28年産の作付過剰は約3,500haであり、千葉県、新潟県に次いで、3番目に多い状況のため、引き続き、過剰作付の解消に取り組む必要があります。

また、平成30年度から米の直接支払交付金(7,500円/10a)が廃止されることから、安定した収益を確保するためには、助成制度を最大限に活用できる多収品種への転換が有効です。

そのため、茨城県では主食用品種である「月の光」を多収品種と同じ助成が得られる知事特認品種に設定し、主食用米から飼料用米への転換を推進しています。



写真1 「月の光」の立毛状況
(H28年、登熟期、筑西市)

10日遅いことから、作期分散ができ、規模拡大を進めやすい特徴があります。

(2) 現地実証結果

平成28年度に、県内各地で「月の光」の実証栽培を実施しています。県西農林事務所経営・普及部門が筑西市に設置した実証圃場においては、「月の光」の穂数は「あさひの夢」より少なかったものの、1穂粒数は多く、玄米重(収量)は約660kg/10aとなり、「あさひの夢」と同程度の収量が得られました(表1)。

「月の光」は産地交付金(12,000円/10a)の対

2. 知事特認品種「月の光」について

(1) 栽培特性

「月の光」は、近年、県内で問題となっているイネ縞葉枯病に抵抗性があり、いもち病にも強く、強稈の多収品種です(写真1)。また、晩生品種のため、収穫時期はコシヒカリより1週間～

表1 「月の光」の生育・収量(筑西市)

品 種 名	稈 長 (cm)	穂 長 (cm)	穂 数 (本/m ²)	1 穂 粒 数 (粒)	倒 伏 程 度 (0-5)	籾 重 (kg/10a)	玄 米 重 (kg/10a)	玄 米 千 粒 重 (g)
月 の 光	86	23.4	368	90	0.0	882	664	23.0
あさひの夢	83	21.7	412	78	0.0	910	660	22.9

注) 移植期は5月12日。

基肥は良多くん一発(20-12-11)を10kgN/10a、追肥はNK-C6を3kgN/10a施用。

倒伏程度は0(無)～5(甚)の6段階評価。玄米重は農家実収。

表 2 「月の光」の収益性（筑西市）

品種名	売 上	水田活用の直接支払交付金		新規需要米	新規需要米	粗 収 益 (a+b+c+d+e) (円 /10a)
	(a)	産地交付金	戦略作物助成	取 組 加 算	導 入 加 算	
	(円 /10a)	(b)	(c)	(d)	(e)	
月 の 光	6,940	12,000	105,000	4,000	-	127,940
あさひの夢	7,250	-	105,000	-	7,000	119,250

注) 収量は坪刈りによる。売上単価 (a) は「月の光」、「あさひの夢」とともに 10 円 /kg とした。

戦略作物助成 (c) の基準単収は 530kg/10a。数量払い。

新規需要米の「取組加算 (d)」および「導入加算 (e)」の額は平成 28 年度の助成額。

肥料費は、月の光 11,109 円 /10a、12,191 円 /10a。

象であることから、収量は「あさひの夢」と同程度であっても、粗収益は、「あさひの夢」より 8,690 円 /10a の増収となりました。(表 2)。

(3) 栽培上の注意点

- ①穂数が少ないので多肥とし、栽植密度を高めて穂数確保に努めてください。
- ②籾米を家畜に給餌する場合、出穂以降の農薬散布は控えます。出穂以降に農薬を使用した場合、家畜へは籾摺りをして玄米で給餌してください。ただし、使用可能な農薬成分指定もあるので、最新の「飼料用米の生産・給与技術マニュアル」を確認してください。
- ③イネ縞葉枯病に抵抗性ですが、ヒメトビウカの発生密度低減のため育苗箱施薬を実施してください。また、いもち病の発生にも注意してください。
- ④作付面積は、平成 29 年に 900ha、平成 30 年に 1,850ha を計画しています。種子の入手については各地域の農業再生協議会へお問い合わせください。なお、購入種子を元にした自家採種はできますが、他者への譲渡・販売はできませんので注意して下さい。

⑤栽培暦は茨城県農業再生協議会のホームページに掲載されています。

3. 飼料用米の安定多収に向けて

日本飼料用米振興協会と農林水産省の共催により、飼料用米の生産技術の向上を目指す「飼料用米多収日本一」が実施され、茨城県から「あきだわら」や「夢あおば」など多収品種を栽培する 31 名の応募がありました。

茨城県の最高成績は関東農政局長賞を受賞しました銚田市の木村孝正さんが栽培した「あきだわら」の 733kg/10a であり、地域の平均単収から 200kg/10a 以上の多収となり、また、品種別の平均収量でも「あきだわら」が 631kg/10a と高い収量が得られました。

なお、コンテストに出品した半数の生産者では飼料用米の作付割合が水稻面積の 50% を超えることから、飼料用米の作付拡大が安定した収益確保を進める選択肢のひとつに選ばれていることがわかります。

飼料用米に関しては、茨城県産地振興課 (TEL: 029 - 301 - 3921)、または農業総合センター専門技術指導員室 (TEL: 0299 - 45 - 8322) までお問い合わせください。

3. 青立ちしにくい大粒大豆「里のほほえみ」の認定品種採用と高品質・安定栽培技術の確立

農業研究所 水田利用研究室 四宮 一隆

1. 「里のほほえみ」の認定品種採用

茨城県における大豆栽培は、県西地域を中心に約4,000ha作付けされており、そのうち大粒大豆が約6割を占めています。しかし、本県の大粒大豆の主力品種「タチナガハ」は、近年、青立ち症状が多発しており、収穫時期の遅れによる、収量と品質の低下を招いており、産地から青立ちしにくい大粒品種の早急な導入が要望されていました。このことから、青立ちしにくい大粒大豆「里のほほえみ」は、平成27年に県認定品種に採用されました。

2. 「里のほほえみ」の特性

「里のほほえみ」は、(国研)東北農業研究センターにおいて育成された品種であり、「タチナガハ」と比較して、以下の特性があります。

- (1) 胚軸の色は緑、葉型は円型、花色は白(写真1)
- (2) ダイズモザイクウイルスに抵抗性、紫斑病抵抗性は強

※ダイズシストセンチュウには「タチナガハ」と同様に弱いため、連作や常発地帯での栽培は、行わないようにしましょう

- (3) 開花期は同等、成熟期は3～6日早い(表1)

※晩播(7月下旬)の場合、「里のほほえみ」の成熟期は「タチナガハ」より約7日遅くなるため、適期播種を心掛けましょう

- (4) 主茎長はやや長い、倒伏には同等に強く、青立ちの発生は少ない(表1、写真2)
- (5) 難裂莢性で最下着莢節位高は高く、コンバイン収穫に適する(表1)
- (6) 子実重は同等、百粒重は重く、粗タンパク質含量は高い(表1)

3. 「里のほほえみ」の高品質・安定栽培技術の確立

「里のほほえみ」は、関東、北陸地域の各県で認定品種に採用され、既存の品種から置き換わるように普及、拡大しています。本県においても、生産振興方針で平成29年産に800haの作付けが計画されており、普及、拡大が見込まれます。そこで、高品質(紫斑粒、しわ粒、裂皮粒などの被害粒及び未熟粒混入率15%以下；農産物検査における一等最高限度)かつ目標収量250kg/10aが得られる栽培法を開発しました。



写真1 「里のほほえみ」(左)と「タチナガハ」(右)の胚軸と花
写真2 成熟期頃の「里のほほえみ」(左)と「タチナガハ」(右)
注釈) 2016年10月22日撮影 注釈) 青立ち程度は、「里のほほえみ」は0、「タチナガハ」は3

表1 「里のほほえみ」と「タチナガハ」の生育、収量及び品質(平成24年～28年)

栽培地	品 種	開花期 (月・日)	成熟期 (月・日)	倒 伏 程 度 (0-5)	青立ち 程 度 (0-5)	主茎長 (cm)	最下着莢 節位高 (cm)	子実重 (kg/10a)	百粒重 (g)	粗タンパク 質含量 (%)
水 戸 市	里のほほえみ	8.02	10.21	1	1	54	14.6	293	40.4	45.3
	タチナガハ	8.01	10.27	0	3	49	10.6	294	37.2	43.5
龍ヶ崎市	里のほほえみ	8.01	10.23	1	1	61	11.6	302	37.6	44.6
	タチナガハ	7.31	10.26	1	4	60	9.8	282	36.6	42.9

【注釈】

- 1) 播種密度は、畦間60cm、株間15cm 播種期は、水戸が6月17日、龍ヶ崎が6月19日
- 2) 倒伏程度は主茎傾斜角度により判定 0(5°以下)、1(6～15°)、2(16～25°)、3(26～45°)、4(46～65°)、5(66°超)
- 3) 青立ち程度は、0(無)、1(微)、2(少)、3(中)、4(多)、5(甚)とした
- 4) 子実重は水分15%換算値

(1) 播種適期

水戸市（表層腐植質黒ボク土）、龍ヶ崎市（中粗粒灰色低地土）ともに6月20日～7月10日播種までは目標収量 250 kg /10a 以上を達成しました。また、被害粒及び未熟粒混入率は、6月30日播種が最も低いため、高品質多収となる播種適期は、6月20日～7月10日です（図1）。

(2) 播種密度

水戸市、龍ヶ崎市ともに播種適期の7月10日までは、いずれの播種密度においても目標収量 250kg/10a をほぼ達成しました。また、狭畦栽培でより多収が得られることも確認されました。さらに、適期以降の播種期では、畦間 30cm、株間 10cm の狭畦栽培により、目標収量を達成できることが明らかとなりました（図2）。

(3) 現地実証と生産者の声

龍ヶ崎市現地ほ場において、適期播種の狭畦栽培により、目標収量 250kg/10a 以上を達成できることを実証しました（表2）。担当農家は、「タチナガハ」より青立ちや裂莢の発生が少ないことを高く評価し、「里のほほえみ」への全面転換を目標に、作付拡大を図りたいという声を伺えました。

4. 今後の予定

「里のほほえみ」の高品質・安定栽培技術は、播種から収穫、乾燥調製までの基本的な栽培技術と合わせて取りまとめ、「里のほほえみ」栽培マニュアル（仮称）として作成、配付する予定です。なお、「里のほほえみ」の高品質・安定栽培技術については、平成 28 年度主要成果として公表する予定です。

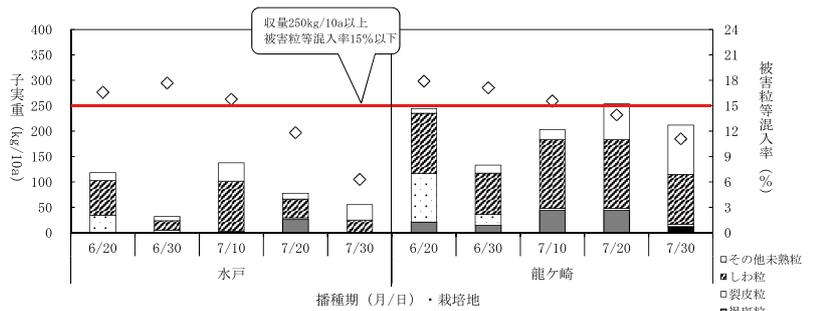


図1 所内ほ場の「里のほほえみ」における播種期別の子実重と被害粒等混入率（平成26年～28年）
 注釈1) 畦間60cm・株間15cmのデータ 子実重は水分15%換算値 被害粒等混入率は300粒から選別、判定した割合
 注釈2) 平成27年の水戸の被害粒等混入率のデータは除く

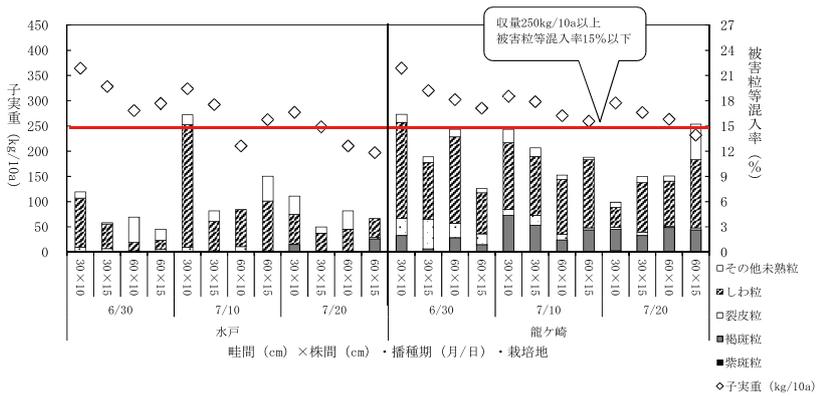


図2 所内ほ場の「里のほほえみ」における播種期と播種密度別の子実重と被害粒等混入率（平成26年～28年）
 注釈1) 子実重の水分換算値、被害粒等混入率の測定法については図1に準じる。

表2 龍ヶ崎市現地ほ場における「里のほほえみ」の生育・収量

試験年度	品種名	播種期 (月.日)	開花期 (月.日)	成熟期 (月.日)	倒伏程度 (0-5)	青立ち程度 (0-5)	主茎長 (cm)	最下着莢節位高 (cm)	莢数 (莢/m ²)	百粒重 (g)	坪刈収量 (kg/10a)
H28	里のほほえみ	6.26	8.06	11.08	0	1	51	12.1	543	38.7	308
H27	里のほほえみ	6.26	8.05	10.29	0	1	59	11.8	607	43.8	348
	タチナガハ	6.23	8.04	10.26	0	1	48	10.0	741	35.5	345

【注釈】

- 1) 播種密度は畦間 30cm、株間 20cm
- 2) 倒伏程度は主茎傾斜角度により判定 0 (5°以下)、1 (6～15°)、2 (16～25°)、3 (26～45°)、4 (46～65°)、5 (66°超)
- 3) 青立ち程度は、0 (無)、1 (微)、2 (少)、3 (中)、4 (多)、5 (甚) とした
- 4) 坪刈収量は水分 15%換算値

4. 最近の米穀情勢について

全国農業協同組合連合会 茨城県本部 米穀部

1. 平成28年産米作柄について

平成28年産主食用米の作付面積は、農水省公表によると138.1万ha(前年差▲2.5万ha)となり、生産数量目標である140.3万haを2.2万ha下回り、27年産から2年連続で超過作付が解消されています。

水稻の作柄は、全国的には生育期間を通じておむね天候に恵まれ、全国の10aあたり収量は544kg(前年比+13kg)、作況指数が「103」となりました。茨城県においては、8月盆以降の天候不順や、県西地区を中心に広がっている「イネ縞葉枯れ病」影響もあり、作況指数「99」となっています。

3. 平成28年産米価格動向について

平成28年産米の29年1月末における市中価格は、飼料用米への転換等の政策によって全体需給が引き締まるなか、前年産米の同時期と比較して、多くの銘柄で1,000～1,500円/60kg程度高い水準となっております。ただし、新潟県産コシヒカリについては、生産量の増加を反映し(新潟県の作況「108」)、前年を若干下回る状況となっております。

○需給見通し

項目		生産数量目標 (735万トン)	自主的取組参考値 (733万トン)
平成28年6月末民間在庫	A	204	204
平成28年産主食用米等生産量	B	750	750
平成28 / 29年主食用米等供給量計	C = A + B	954	954
平成28 / 29年主食用米等需要量	D	754	754
平成29年6月末民間在庫量	E = C - D	200	200
平成29年産主食用米等生産量	F	735	733
平成29 / 30年主食用米等供給量計	G = E + F	935	933
平成29 / 30年主食用米等需要量	H	753	753
平成30年6月末民間在庫量	I = G - H	182	180

注1：平成28年産主食用米等の生産量は、平成28年10月15日現在の27年産米水稻の予想収穫量(主食用)。

注2：平成28/29年主食用米等需要量は、相対取引価格の上昇が需要量に及ぼす影響を踏まえ補正。

注3：平成29/30年主食用米等需要量については、現時点で価格の状況を見通すことが困難であるため、価格の変動が生じた場合の需要量への影響は見込まれていない。

2. 平成28年産米農産物検査結果について

農水省公表の農産物検査数量では、12月31日時点で4,212千トンとなっており、前年同時期を63千トン上回っています。1等比率は83.6%で、格落ちの主な理由は、心白及び腹白、充実度、着色粒となっております。

○水稻うるち米検査数量(農林水産省、12月末現在速報値)

項目	検査数量 (千トン)	等級別比率(%)			
		1等	2等	3等	規格外
28年産	4,212.3	83.6	13.9	1.4	1.2
27年産	4,149.4	82.6	14.6	1.7	1.1
26年産	4,469.6	81.5	15.8	1.3	1.3
(28-27)	62.9	1.0	▲0.7	▲0.3	0.0
(28-26)	▲257.3	2.1	▲1.9	0.1	▲0.2

4. 平成29年産米生産数量目標について

平成29年産の生産数量目標は、近年のトレンドとして需要が概ね8万トン減少していることを勘案し、735万トン(前年比▲8万トン)と設定されました。生産数量目標通りの生産量となった場合、平成30年6月末の民間在庫量は182万トンとなります。

29年産米の自主的取組参考値は、平成30年6月末民間在庫量が安定供給を確保できる水準である180万トンとなるものとして、733万トン(前年比▲2万トン)と設定されました。

5. がんばる種子生産者！



JA 常陸種子生産部会大宮支部
支部長 茅野 一巳さん

◆種子生産の規模

・水稲 コシヒカリ 60a

◆保有機械

・トラクター	1 台
・コンバイン	1 台
・グリーンコンテナ	1 台
・乾燥機	2 台
・田植機	1 台
・動力噴霧器	1 台

◆品質向上の取り組み

◆品質向上の取り組み

良質な種子を生産するためには、まず倒伏をさせない肥培管理が重要なので毎年土壌診断を実施して、そのほ場にあった肥料設定を行い、地力の維持向上を図っています。

収穫時期は、穂首付近に淡緑色の籾が全体の籾の 5% 程度ある状態（籾水分 25% 以下）になってから行い。刈取り開始時刻は稲から露が消える 10 時以降を目途に基本的に忠実に実施しています。

◆栽培管理

水稲の生育には、適度な生育量と根が生き生きしていることが最も重要で、そのためには、適切な中干しが不可欠となるので、適期中干しを行っております。

病害虫防除では、水田防除協議会が行う航空防除だけでなく、部会独自での二回の無人ヘリによる防除を行い、さらに、稲こうじの防除をドイツボルドー A の散布を共同で実施しています。

◆今後の抱負

農業政策が大きな転換期を迎えている中、常に部会員及び関係機関と連携をとりながら、優良種子生産意識を高めるため、研修会・講習会を開催して他地域の部会活動・栽培管理等の情報収集をしながら、需要者のニーズに応えられるよう、優良種子の生産に取り組んでいきたいと思っております。



6. 穀物改良ニュース

(1) 回転備蓄（低温備蓄）種子の利用が拡大

平成21年度に種子の安定供給と、低価格種子の供給のために導入された回転備蓄種子制度が、徐々に県内に認知されてきました。回転備蓄種子とは、当年に気象災害等で十分な種子量が確保できないことを見越し、前年に種子を多めに確保し、不測の事態に備えるもので、需要者には「前年産でも当年産と作物の出来は変わらない」「当年産種子より安く購入できたので、経営的に助かった」等の声が寄せられています。

平成28年度の回転備蓄種子の利用状況は、稲55トン、麦100トンでした。農業総合センターの試験研究で「問題なし」とされた大豆種子についても今後適宜拡大予定ですので、変わらずのご利用をお願いします。

(2) 落花生生産者・関係機関情報交換会について

2月28日（火）13時から水戸京成ホテル3F会議室において、「平成28年度落花生生産者・関係機関情報交換会」が、生産者を含め16名の出席により開催されました。

情報交換会の中では、今年産は平年並みの生産量に戻したものの、収穫時における長雨等により品質面での影響が大きく、国産落花生の消費動向に影響を及ぼす状況への懸念や、今後の対策等に出席者から活発な意見が出されました。

千葉県に続いて全国2位の位置にある本県の落花生であります。平成28年産落花生作付面積が587ha（前年比95%）と連続して減少している現状の中、生産者の高齢化対策が緊急の課題となっています。

落花生生産における機械化は、他の品目と比べ遅いものがありましたが、3年前から国の農研機構では「落花生の超省力生産体制の実証」事業の中で、落花生播種機や落花生収穫機の開発と実用化に取り組んできていることから、1日も早い普及が求められています。

今後も、今回のような情報交換会を適宜開催していくことを確認し、交換会を終了しました。

(3) 全国そば優良生産表彰式について

平成28年度全国そば優良生産表彰式が3月22日如水会館（東京都千代田区）で開催され、藤田博子さん（常陸大宮市）が全国農業協同組合中央会会長賞を、八千代町の小竹敏男さんが（一社）日本麺類業団体連合会会長賞を、じょうほくそば生産組合さん（城里町）が全国蕎麦製粉協同組合理事長賞を受賞されました。

お三人とも農地の集積等による経営規模の拡大や土づくりなど基本技術の励行、機械化による経営の効率化に取り組まれており、契約栽培など安定的な生産・出荷と地産地消や消費拡大などの取り組みが評価されたもので、今後のご活躍が期待されます。



落花生生産者情報交換会



全国そば優良生産表彰式